

報文

## 保護者支援のあり方を習得するための授業方法に関する一考察(第2報)

～「保育相談支援」がよりよい学生への学びになるために～

江荊川 淳子

柴田学園大学 短期大学部 保育科

## A Study on the Teaching Method to Learn the Ideal Way of Parent Support (Part2)

～Toward the Effective Learning in‘Childcare Counseling Support’～

Junko Ekarigawa

Department of Early Childhood Education, Sibata Gakuen University Junior College

Key words : 保育相談支援      Childcare Counseling Support  
保育士養成校      Nursery Teacher Training School  
保護者支援      Parent Support  
子育て支援      Childcare Support

### 要旨

本稿は、保護者支援のあり方を習得するための授業方法に関する一考察(第1報)～「保育相談支援」がよりよい学生への学びになるために～の継続研究を記したものである。2019(令和元)年・2020(令和2)年の2年間は、「保育相談支援(子育て支援)」(2019(令和元)年度入学生より科目名が保育相談支援から子育て支援に変更)においてどのような授業方法が望ましいかを研究し、グループワークの効果をまとめている。そこで2021(令和3)年は、弘前地区における保育者子育て支援アンケート(筆者が2019(令和元)年12月に実施)より、保育者が日頃抱えている子育て相談についての現状や問題点から、学生の学びに必要な知識や技術面を養うための授業方法を考察し、その上で演習を実践した。学生同士の話し合いを重点的に行うことは、コミュニケーション能力の向上へとつながり、さらに子どもの理解においても、様々な見方や考え方に触れることから多様性を感じる経験となった。その結果、学生の子育て支援力を養う上で効果があることがわかった。また、学生の授業アンケートより、受講前後の気持ちの変化等から保育者の役割の重要性を感じるものとなった。

#### 1. 背景と目的

筆者は、子育て支援において求められるキーワードとして“子どもの理解”“地域の子育て支援”の2つがあると考えている。子育て支援とは、保護者が抱く子育ての不安や戸惑いを解消したり、子どもの成長を感じたりすることで、子どもを育

てる喜びを実感し、保護者の養育力を高めることである。保護者からの相談内容は、園生活の様子や子どもの発育・発達など子どもに関する悩みである。そのためにも、保育者は日々の保育から子どもの姿を捉え、しっかりと把握しながら子どもと関わる必要がある。一人一人の“子ども

の理解”を深めることが、子どもと保護者の双方を支えていく上で、求められる姿勢であろう。

また、もう一つの“地域の子育て支援”では、核家族化が進み、孤独な子育て家庭が増えている社会背景から、未就園児の親子を対象とした親子の交流や施設の開放・一時保育・子育てに関する相談援助等が行われている。各地域において“地域の子育て支援”の必要性が求められている状況である。

そこで保育士養成校では、学生が保育現場で働く姿をイメージしながら、保育者(以下、保育士・幼稚園教諭・保育教諭をまとめて保育者とする)としての資質や技術面を磨き、知識を深めなければならない。保育所保育指針では、保育所の役割として「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護および教育を一体的に行うこと」<sup>1)</sup>としている。また、保育士については「保育所における保育士は、児童福祉法第18条の4の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものであり、その職責を遂行するための専門性の向上に絶えず努めなければならない。」<sup>2)</sup>としている。

保育所保育指針であげられている保育に関する基本原則は、子どもの最善の利益を念頭に置くことである。そして、子育て支援に求められる2つのキーワードのうちの“子どもの理解”に着目して考えた場合、幼児教育施設(以下、幼稚園・保育所・認定こども園をまとめて幼児教育施設とする)において保育者は、子どもの成長を見通し、今ある子どもの姿を理解し働きかけなければならない。そして子育てのパートナーとして保護者と情報を共有しながら、子どもの成長を共に考えることで、保護者に寄り添うことができると考えられる。そのことは、保育者が専門性を生かしながら保護者と信頼関係を築くことであり、保護者へ

の子育て支援につながることを意味している。

また、保育士養成教育の研究をしている福井、小栗、滝川(2008)は、「子育て支援力」の育成について、子育てに関する相談の内容が多岐に渡ることを受け「これに対応していくためには専門機関との連携とともに、『保育力』を身につけていく過程で学ぶ様々な知識が必要不可欠である。(中略)

『保育力』を抜きにした『子育て支援力』は有り得ず、むしろ『保育力』は『子育て支援力』の基盤であると考えられる<sup>3)</sup>としている。ここで述べている「保育力」は子どもに関する理解や子どもとの関わり方についてである。また「子育て支援力」とは、「保育力」を基盤に「子育て支援」を実践する力のことである。このことから、子育て支援には、子どものニーズに応答し、感じとる力として“子どもの理解”を養うことが必要不可欠な学びとなっている。

以上のことから保育士養成校では、「保育相談支援(子育て支援)」の学びにおいて、“子どもの理解”を深めながら子育て支援力を身につけることが重要であると考えられる。

筆者は2019(令和元)年に弘前市内の3園の保護者に対し、保護者子育てアンケートを行っている。それは、授業方法として、子育ての状況を学生に知ってもらい、子育て支援の学びに生かすためである。保護者の子育てについて、江莉川(2020)は「保護者が子育てを頑張りたいという強い思いを感じると同時に、半数近くの方が子育ての悩みに対し不安を抱え、仕事と育児と家事との両立にストレスを感じながら、時間とのやりくりの狭間で子育てに葛藤を抱いている。」と保護者子育てアンケートの結果を示した。<sup>4)</sup>その様子から、まず授業の中で保護者の切実な悩みに合わせた支援方法を調べ、次にグループで話し合いを行った。このことは、学生のコミュニケーション能力の向上と自己肯定感を高める結果となり、グループワークが効果的であると示した。しかし、少数ではあるが、学生の中には、保護者支援の対応をグループでは考えられたが、一人でその対応ができるのかという戸惑いを見せる学生もいた。

同じような戸惑いとして、保育現場での状況について中山、杉岡(2016)は「保育士は相談支援において、『相談支援への戸惑い・不安』が初期(経験が少ない時期)には見られやすいことが理解された。これは、保育士が相談支援の専門家ではないという自信のなさや、経験の少なさからくる不安が関連しており、相談場面における保育士の焦りといった心の動揺につながるものといえる。」<sup>5)</sup>と述べている。

筆者は幼稚園教諭として園における子育て支援を行ってきたことがある。中山、杉岡(2016)が示している通り、保育現場での経験値が少ない時には、保護者対応に不安を抱え、他の職員に相談しながら対応にあたってきた。具体的には、子どもの姿を伝えたり、アドバイスをしたり、時には気になる様子を理解してもらうために個別面談や関係機関と連携を取ることも行ってきた。

保護者によっては、子どもの姿に理解を示し協力してくれる方もいれば、こちらの思いが伝わらず、拒む方や消極的な態度を示す方もいた。子育て支援は、保育者と保護者による個別の対応が主となるが、筆者が勤めていた園では、子育て支援について職員全体で話し合い、子どもの姿や保護者対応を共有できるように努めていた。このように保育現場では、保護者と向き合う際に、子育て支援の難しさをそれぞれが抱えながらも、日々の保育や保護者対応が行われているのが現状である。

学生は保育士養成校での2年間の学びの中で、子育て支援の現場に携わる経験がなく、保育実習や教育実習では、保護者と挨拶程度の関わりしかしていない状況である。そのため保育現場では、実際に保育者が保護者対応をどのように行っているのか、現状を知ることから始めることが必要だと考えた。筆者は2019(令和元)年に弘前市内の保育者に対し、子育て支援アンケートを行っている。まずはその結果を授業に取り入れることで、保育現場の現状を学生がどのように感じ、どのような学びが必要かを学生自身が保育者子育てアンケートから探り考察できるようにした。

### 1-1. 保育者子育て支援アンケート

[調査方法] 15項目の設問によるマトリクス形式と自由記述

[調査対象及び人数] 弘前市の保育所・認定こども園・幼稚園から各1園 3園の職員(パート含む)

アンケート配布数: 95票

回答数: 52票

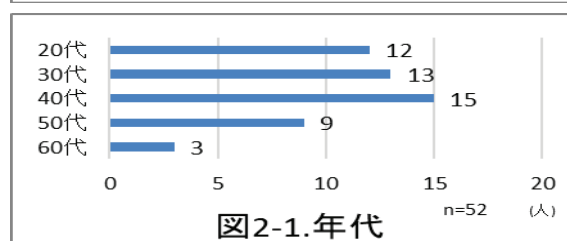
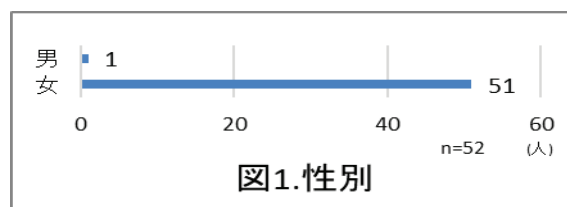
[調査時期] 2019(令和元)年12月

[調査内容] 子育て支援の現状とニーズについて他

例年、本学の学生の7割が青森県の保育現場に就職しているため、弘前市の保育所、認定こども園、幼稚園の幼児教育施設各1園に要請をした。(施設の選択に当たっては、市内各地からバス通園で園児が通っていることや園児数が多いことを考慮した。また、「保育相談支援(子育て支援)」は保育士課程・ベビーシッター資格の科目であり、幼稚園は対象ではないが、子育て支援の現状を知るためのアンケートとして幼稚園にも要請した。)幼稚園 [柴田幼稚園]・保育所 [みどり保育園]・認定こども園 [幼保連携型認定こども園弘前すみれ保育園] から協力を得て実施した。(但し、柴田幼稚園は2020(令和2)年から幼稚園型の認定こども園に移行している。)

### 1-2. 保育者子育て支援アンケートの結果

保育者の「性別」「年代」「勤務年数」「役職」「勤務形態」は図1~図4の通りである。



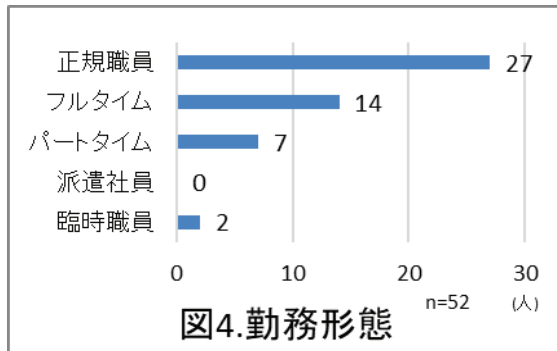
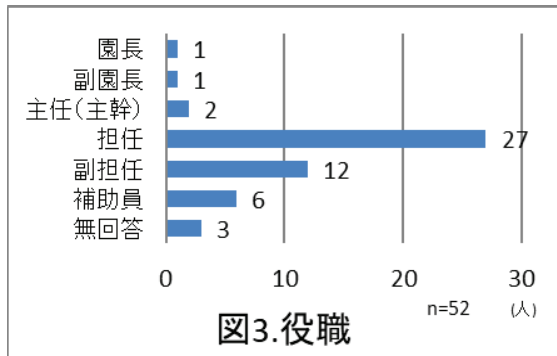
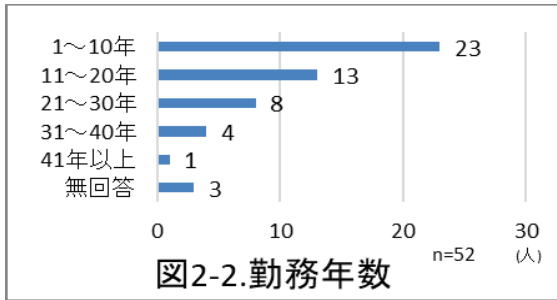


図5～図6は保育者自身の子育てについての情報を知るために「配偶者の有無」「子どもの有無」「子育てを担っている人」について伺った。

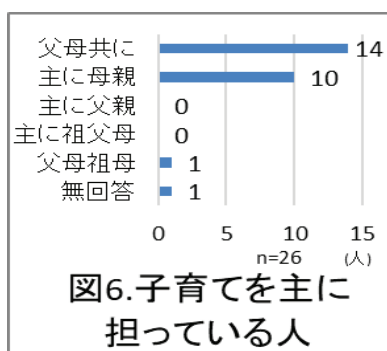
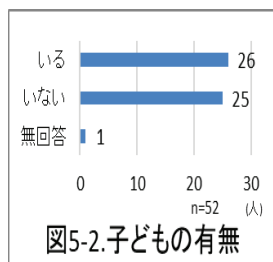
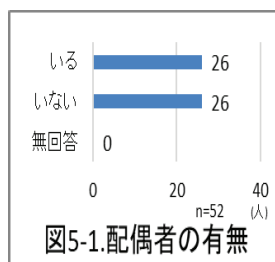


図7については、筆者が幼稚園教諭として勤めていた際、自分の子育ての方法などを保護者へのアドバイスとして伝えていた経験があり、その必要性を感じていたため、参考までにお聞きした。また図7の設問理由を自由記述で記入してもらい、カテゴリ別に分けたものが図8である。筆者と同様に子育ての経験をもつ多くの保育者が自身の経験談を伝え役立てていることが分かった。経験談は保護者にとって理解しやすく、子育ての成功体験を聞くことでアドバイスを受け入れやすいと思われる。逆に自身の子育てについて、「役立っていない」「役立てようとは思わない」と答えた3名の理由は、「時代の流れがある」「子育てと保育は別物である」という意見だった。このように自身の子育て経験と今の保護者の子育てでは、考え方ややり方に違いがあることや個人のプライバシーを大切にしたいという意見だと受けとった。

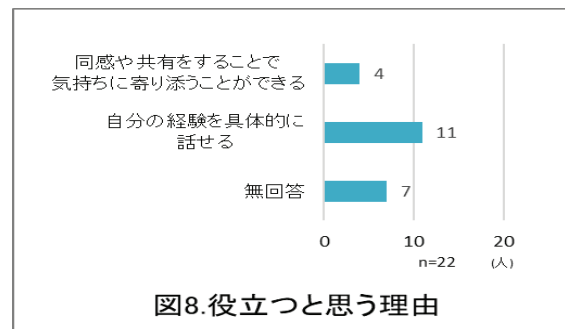
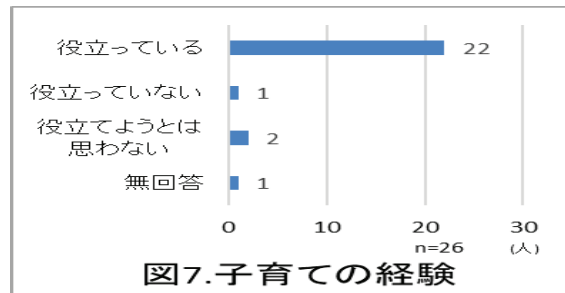


図9～図12までは日頃の保護者対応についてまとめたものである。特に図9「助言の方法や手段」では、直接保護者と顔を合わせながら口頭で伝えたり、連絡帳を活用したりしていることが分かった。保護者とのやりとりから、コミュニケーション能力の必要性を感じとることができる。しかし、図10、「子育て相談で難しさを感じることで」では、どの項目も「よく感じる」「時々感じる」を合わせると、約8割の方がその大変さを実感しているこ

とが分かった。図13は保育者自身が勤めながらも、身につけたいと考える専門的な知識や技術である。

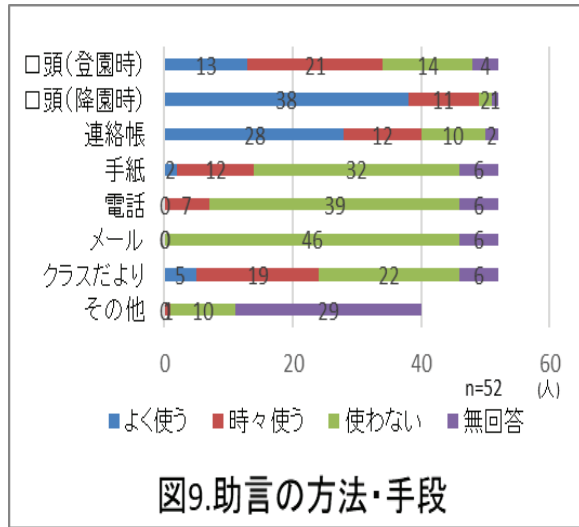


図9.助言の方法・手段

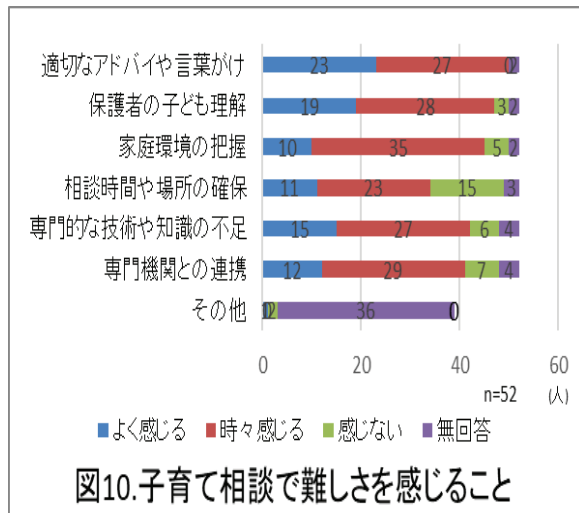


図10.子育て相談で難しさを感じること

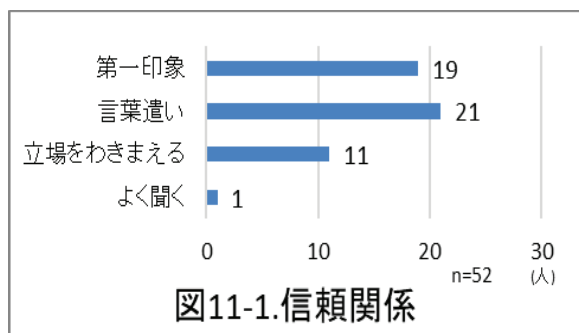


図11-1.信頼関係

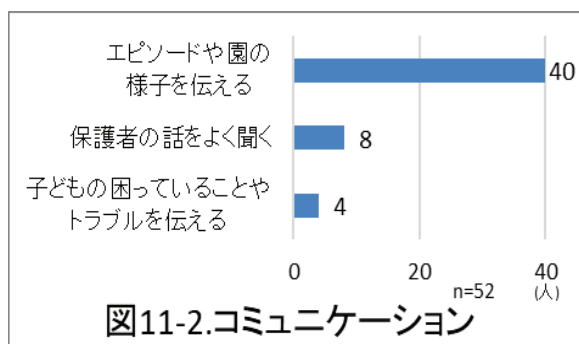


図11-2.コミュニケーション

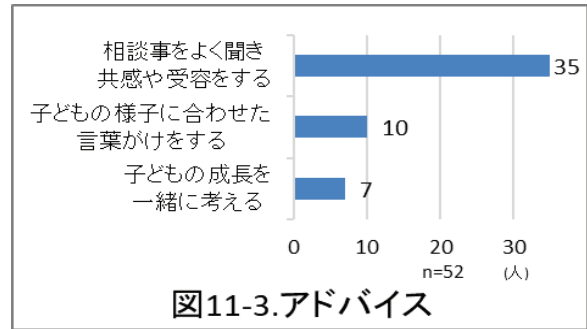


図11-3.アドバイス

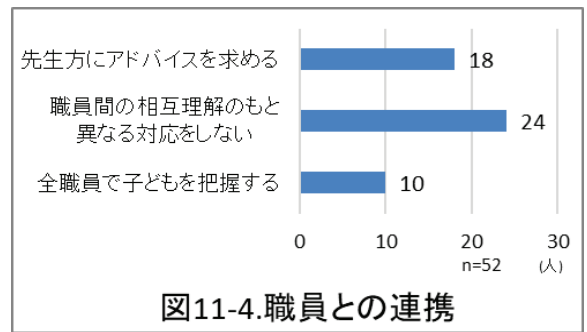


図11-4.職員との連携

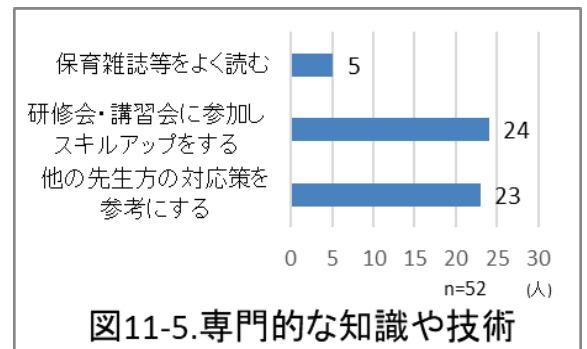


図11-5.専門的な知識や技術

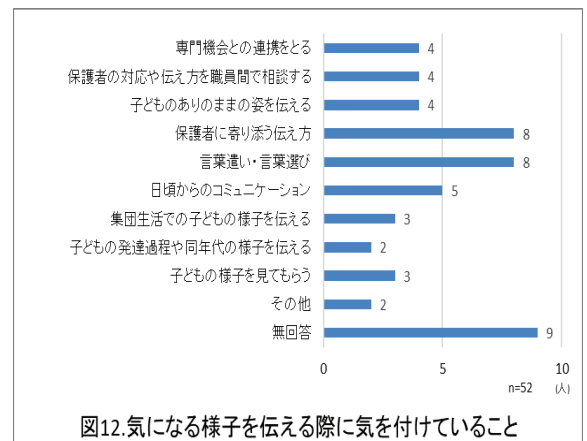


図12.気になる様子を伝える際に気を付けていること

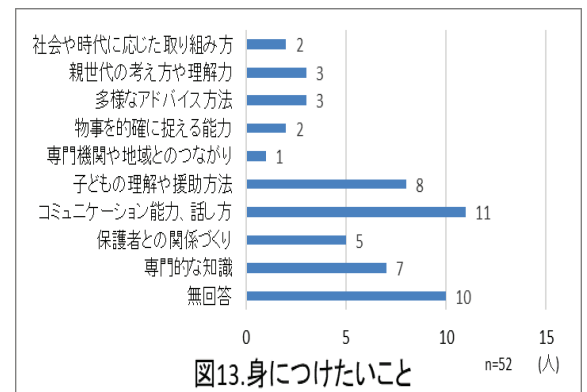


図13.身につけたいこと



図 10. 図 11-1. 図 11-2. 図 11-3. 図 12 から、保育者は日頃から保護者への対応について、言葉遣いや雰囲気、態度に細心の注意を心がけて関わっていることが分かる。そのため、保育者と保護者は子育てのパートナーではあるが、図 11-1 から見て分かるように、保育者は立場をわきまえて対応しており、信頼関係を築くための手段や方法にも配慮している。また図 11-2 からコミュニケーションのやり取りについて、エピソードや園生活の様子を伝えることを第一に考えており、そのためにも子どもと関わり、子どもの理解に努めていることが分かる。そして図 11-3 から、保護者に寄り添って関わる姿勢が感じられ、それは保育者個人としての心構えでもあるが、図 11-4 から読み取れるように園全体として共通理解を図り、他の職員と連携をしながら、保護者対応をしていることが分かる。

保育所保育指針には、保育所職員に求められる専門性として「各職員は、自己評価に基づく課題等を踏まえ、保育所内外の研修等を通じて、保育士・看護師・調理員・栄養士等、それぞれの職務内容に応じた専門性を高めるため、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上に努めなければならない。」としている。<sup>9)</sup>そのため、図 11-5 からは「研修会・講習会への参加」や「他の先生の対応策を参考にする」といった方法を園内外の研修を通して実践している。また、今後身につけたいこととして図 13 では、「コミュニケーション能力、話し方」や「子どもの理解や援助方法」そして「専門的な知識」と具体的なスキルについてあげられている。保育者は、自身の課題とするスキルへの習得に向けて、向上心を抱いていることが伺える。

保育実践における現職教育について、門田(2020)は「継続して学び続ける保育者が専門性のどのステージでどのような関心事や課題を抱えていようとも、現職教育がどのような形態で提供されようとも、各自が現職教育の中でどのような方法で学ぼうとも、その学び続ける行為そのものを教育プロセスと捉える視点を、受ける側・支える側が現職として位置づけているかどうか問われ

ているといえる」<sup>7)</sup>と述べている。保育者は現職教育として常に個々の専門的スキルや資質を向上させ、知識や経験を積み重ねていくことが必要である。

今回の保育者子育てアンケートの結果から、保護者とのコミュニケーション能力や話し方、子どもの理解や援助方法、そして専門的な知識について、保育者自身が専門的スキルを向上させるために日頃から学ぶプロセスとして意識していることが分かった。

## 2. 学生の気付き

授業にて、保育者子育て支援アンケートを見せ、そこから感じたことや気付いたことを自由記述で行った。(学生の原文通り)

- ・降園時に口頭で助言することが多い。その中でも、適切なアドバイスや言葉がけが難しいということが分かった。気を付けていることでは、やはり保護者に寄り添うような伝え方や言葉遣い、選びが多かったので、いろいろ言葉を知りたいです。
- ・保護者への言葉がけの大変さがよく分かりました。私も、コミュニケーション能力が高くないので、直していきたい一つでもあります。だから、言葉をたくさん調べ、言う時に適切な対応をできるようにしたいです。
- ・保護者へのアドバイスや言葉がけは、やはり難しいんだなと思った。身につけたいことの中に“コミュニケーション能力”や“話し方”がとても多かったのを見て、今の私も話し方に困っていて就職するまでに身につけたいと思った。
- ・保育者も私たちと同じで、適切なアドバイスや言葉がけに難しさを感じているのだと思った。
- ・親と子ども、どちらも理解が必要だと感じた。
- ・現場で働いている先生方も保護者への適切なアドバイスや助言が難しいと感じていることが分かった。保育者の何気なく言った言葉に気を悪くされる方もいるためか、現場の先生方は、言葉遣い、言葉選びに気を使っていることが分かった。

- ・先輩保育士の中でも、言葉がけの仕方や、子どもの理解や援助方法、専門的な知識が不足していると感じていることを知り、私たちはもっとさらに身につけるための努力をする必要があると感じた。その家庭に合わせて対応を変えたり、言葉を選んだりすることはとても難しいことだと改めて思った。
- ・信頼関係を築いていくためにコミュニケーションを日頃からとることが大事だと思うので、いろんな人と関わってコミュニケーション能力を高めたいと感じた。
- ・自分が子どもや保護者のことを思って話しても、不快にさせたり、上手く伝わらないことなどがあつたらだめなので、話し方にはよく気を付けたいと思った。
- ・保護者に伝えるときは、やはり相手の立場になり、どのようにすれば保護者は安心するのかなど考えていかなければならないと思った。保育者になってからも、話し方等を身につけたいと思うのは、やはり伝え方などが難しいからだと感じた。
- ・専門機関や地域とのつながりが意外と少なくて驚いた。親世代の考えや理解力は必要だと思います。私は理解力が足りないので、理解する力をもっと身につけたいです。

保育者子育て支援アンケートの結果を受け、保育者自身が保護者との対応に難しさを感じている姿は、学生にとって意外なものであった。しかし、その難しさについて、現場の状況から学生自身が現在の自分と就職後の姿を照らし合わせた時、多くの学生が“コミュニケーション能力”と“子ども理解とその伝え方”について、自ら学ぶべきスキルとして着目していた。このことは、学生もその重要性を読み取り感じたことであり、“コミュニケーション能力”と“子ども理解とその伝え方”を理解し学ぶべき専門性であると捉えていることが分かった。

大学生の人間関係育成に関する研究において、加藤、安藤(2019)は、「学生自身が人間関係力向上

の必要性を感じ、自らの課題や目標の達成に向けて取り組めるよう意欲を高めていくことが大切であり、保育者養成校においては、問題(課題)を解決する力、自分の意見・考えを伝える力等の育成が課題であることが窺えた<sup>8)</sup>としている。人間関係力の向上には、学生の学ぶ意識を高めるためにも、学生自身がその問題(課題)の必要性を感じ学ぶことでより効果を得られると考えられる。

以上のことから、「保育相談支援(子育て支援)」の授業方法として、保育者アンケートの分析した結果と学生の求めるスキルについて合致している“コミュニケーション能力”と“子ども理解とその伝え方”の2つを柱として授業を実施することにした。

### 3. 授業方法

令和3年度の授業は『学ぶ・わかる・みえる演習・保育と子育て支援』<sup>9)</sup>をテキストとし、前半は理論を学び、後半は、ワーク形式でグループによる演習(ロールプレイ・グループワーク等)を行った。演習は毎回グループメンバーを代え、演習内容によっては人数を変更している。それは、筆者が保育者子育て支援アンケートの気付きから、“コミュニケーション能力”を伸ばす必要性を感じたため、毎回の演習メンバーを代え、様々な人との話し合いにより、コミュニケーション能力を伸ばすことができるのではないかと考えたためである。『保育士・幼稚園教諭のための保護者支援保育ソーシャルワークで学ぶ相談支援』では、保育士に必要なコミュニケーションスキルについて「人間がコミュニケーションをとるうえで最もうれしいこと、それは、『しっかりと、話を聴いてもらえた』という思いです。つまり、聞き上手になることを心がけることが必要です。また、言語的コミュニケーションの場合は、同時に、言葉の抑揚、言い回し、強弱、速さ、態度、表情といった非言語的コミュニケーションが重要な意味を持ちます。」<sup>10)</sup>と述べている。

このことから、コミュニケーションは相手に寄り添い、気持ちを聞きながら伝える能力や技術で

もある。そのため、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションを意識しながら演習に取り組むことで、その能力や技術面を伸ばす第一歩となると考えた。特定の決まった人との演習となれば、コミュニケーション能力を引き出すことが難しくなるため、たくさんの方との演習を実践することとした。

また、もう一つの課題点でもある、“子ども理解とその伝え方”については、まずは学生自身の子ども理解を養うことを目的としながら、その伝え方を考えることで能力面が向上するのではないかと考えた。その方法は①「ネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法」②「リフレーミングによる伝え方」の2つの実施である。それらは2つとも保育現場の状況をイメージしながら、保護者の相談に対応できるよう、筆者がテキストを参考に課題を用意した。そして、1グループ6・7名からなるグループを10グループ作り、その中で①「ネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法」と②「リフレーミングによる伝え方」を話し合った。まず①は26個のネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法である。表1(一部抜粋)つぎに②「リフレーミングによる伝え方」は保護者からの相談に対して保育者のリフレーミングと子どもの視点からのメッセージを読み取る方法として、10項目についてグループワークを行った表2(一部抜粋)。

結果として①「ネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法」から筆者が感じたことは、①ネガティブとポジティブは表裏一体であり、大人(保護者や保育者)は子どもの気になる姿をそのまま捉えがちではあるが、子どもを見る見方や捉え方を変えることで別の側面が見えてくることにもなり、子ども理解や子どもを見る力(能力)が身につくということである。

今回、26個の項目において、各グループの様々な回答が出てきたことで、学生は今まで考えつかない捉え方や見方をすることができ、柔軟な考え方をすることができた。学生からは「自分たちのグループでは考えつかない表現だった」と様々な

捉え方に着目していた。その中でも表1の「怒りっぽい」では、①グループ「感情を素直に出せる」②グループ「正義感が強い」⑤グループ「実は優しい」⑨「真面目」など見方が様々表現されている。このように、一人一人その子どもの性格や表情、しぐさ、家庭背景が違うように、捉え方や見方も一人一人に合わせたポジティブな表現で捉えることが必要だと考える。

また、捉え方の違いについて、いろいろな意見を受け入れることも保育者には必要なことだと考えられる。『幼児理解に基づいた評価』では、「幼児は周囲の人に自分がどう見られているかを敏感に感じ取ります。教師が幼児に何か問題を感じながら接していると、どうしてもその幼児に接するときの態度や表情、言葉などにそれが現れてくるようです。(中略) 反対に、その幼児の育ちつつある面やよさに目が向けられていると、自然に関わり方が温かいものになり、その幼児の行動を信頼して見守ることができるようになります。」<sup>11)</sup>としている。このように「ネガティブ」な気持ちでいたり、そのような視点で子どもや保護者と関わったりすることで、本人や周りに与える影響は大きく、その後の関わり方にも左右してしまうのではないか。そのような意味でもいろいろな見方で考えながら関わるのが、子どもの理解にもつながり、さらに子どもと保育者、保護者と保育者の関係性も良い方向に向かうと推測される。

つぎに、②「リフレーミングによる伝え方」では、テキストのワーク『演習・保育と子育て支援』のねらいには「保護者が困ったと感じている子どもの行動や保護者自身のことについて、別の視点から捉え直し表現してみよう。特に、肯定的に捉え直してみると、新たな関わりの可能性を発見するきっかけをつくることができるだろう。」<sup>12)</sup>としている。以上のことを踏まえて表2は①「ネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法」でのグループワークを経験してから行った。そのため②のグループワークの様子を見て筆者が感じたことは、①の経験を生かし、言葉の見方を肯定的に捉えながら話し合いを進めていたということであ



表1 ◇ネガティブな言葉をポジティブな言葉に置き換えて考える

	ポジティブ									
	①グループ	②グループ	③グループ	④グループ	⑤グループ	⑥グループ	⑦グループ	⑧グループ	⑨グループ	⑩グループ
怒りっぽい	感情を素直に出せる	正義感が強い	自分の気持ちさらけ出す	自分の気持ちを表現できる	実は優しい	感情豊か	自分の感情に素直	責任感、正義感がある	真面目	自分の感情を素直に表せる
気が弱い	優しい	人を大切にしている	シャイ	協調性がある	協調性がある	繊細	優しさ	思いやりがある	優しい	優しい
しつこい	心が強い・元氣	粘り強い	自分の考えがある	粘り強い	粘り強い	積極的	粘り強い	意思の主張ができる	一生懸命	相手が好き
でしゃばり	標を明るくする	世話好き	世話好き	自己主張できる	自分自身を高める	積極的	気が強い	リーダー性があり、先頭に立って行動できる	積極的	積極的
飽きっぽい	切り替えが早い	好奇心旺盛	たくさんのことに興味をもてる	多趣味	たくさんのことに興味がある	好奇心旺盛	切り替えが早い	行動転換が早い	好奇心がある	いろいろなおことに興味がある
生意氣	愛嬌深い	元氣	自信に満ちている	自己主張できる	平等性がある	自我がある	怖いもの知らず		フレンドリー	フレンドリー
あわてんぼう	時間を大事にしている	行動的	行動的	行動が早い	人に幸せを届けそう	行動が早い	時間を守る	行動が早い	時間厳守	時間を大切にしている
食わず嫌い	好き嫌いはつきりしている	想像力が豊か	こだわりがある	意思がはっきりしている	はっきりしている	好き嫌いはつきりしている	慎重		美食家	好きなものを大切にしている
気まぐれ、気分屋	思考力豊か	物事にこだわらない	前向き	決断が早い	自由に生きている	周りに左右されない	正直	気持ちの切り替えが早い	感情豊か	自分の感情に素直
口が軽い、うそがつけない	素直・正直者	正直	素直	正直	正直	正直	正直	正直者	正直	正直
コンプレックスが強い、多い	謙虚	謙虚	変わる希望がある	プライドがある	個性的	自分を客観視できる	謙虚	自己評価できる	謙虚	周りを見ている
できないことが多い	伸びしろあり	可能性がある	いろいろなおことにチャレンジでききる	自分の能力を知っている	伸びしろがある	伸びしろがある	一つのことにかけている		たくさんの可能性がある	一つのことを極める
欠点、苦手なことが多い	これから成長する	伸びしろがある	克服するための努力ができる	自分の能力を知っている	よく考えている	伸びしろがある	一つのことにかけている	伸びしろがある	自分を理解している	自分がかかっている

表2 ◇リフレミングと子どもの気持ちの代弁 ※数字は①～⑩グループの意見

1. 保護者A「子どもに『ママなんて大嫌い!!』と言われてショックです。私の愛情が足りないのでしょうか。⇒保育者のリフレミング

①子どもが“大嫌い”というのにも必ず意味があって言ったこと。大嫌いの言葉は信頼している人・大好きな人だからこそ言える。不満の言葉が素直に出してしまった。うまく表現できない。素直になれない子どもなりの愛情表現。	⑥「愛着関係が築けている証拠ですね」
②「大嫌いって言われてしまうと落ち込みますよね」とママの気持ちに共感し「でも大嫌いと言えらることは、ママとの信頼関係が良くできているから言えることなんです。子どももままだ幼いですし、一時的な感情だったり、まだまだ言葉を知らないの、自分の気持ちを上手に表現できないのですよ。それにお子さんはママのことが大好きなんですよ」	⑦「本気で思いを伝えられるほどお母さんのこと信頼しているんですよ」
③「小さい子は語彙力が少なく自分の気持ちを伝えることができないので、とっさに“嫌い”って言葉が出てくるだけだと思います。本当に嫌いなわけではないので、気にしないで流すくらいの余裕を持ちましょう！」	⑧「もっとママに構ってほしくて、わざと言っていているんですよ。だから、本当は大嫌いだなと思ってないと思いますよ。今よりもっとお子さんに話しかけてみたらいいと思いますよ」
④「お母さんのことが大好きで、構ってほしいんですよ」	⑨「子どもに対して一生懸命向き合っている証拠だと思います」
⑤「そうだったんですね。それは少しショックですね。(共感する)勢いで言っているだけで本当の気持ちは大好きなんですよ。なので真に受けず環境を変えてみてはどうですか」	⑩「これも一つの成長で、みんなが通る道。ママを信頼しているから言っているんですよ」

★子どもの視点からのメッセージ

①“大嫌い”と言った後のママの行動を試している。不満があって言ってしまった。	⑥「甘えたり感情をぶついたりできるくらいお母さんを信頼しているんですよ」
②自分のやりたいことを否定され、面白くないことがあると、「ママ嫌い」と言ってしまう。	⑦寂しかったから、お母さんの気を引きたい。
③かまっしてほしい。	⑧もっとママに構ってほしくて、大嫌いだななんて思っていない。
④話したいことがたくさんある。	⑨「本当は嫌いだはないが、その時の感情を勢いで云ってしまったのだと思います」
⑤かまっしてほしい。	⑩お母さんにわかってほしいと思っただから。

2. 保護者B「子どもが優柔不断です。見ているとイライラしてしまいます。」⇒保育者のリフレミング

①優柔不断なのは、様々なことを様々な場面で考えている証拠。思考力豊か・探求心がある。よく考えている。子どもなりにすごく迷っている。	⑥「よく考えているんですよ」
②「お仕事忙しい時にマイペースに行動されたらイライラしてしまいますね」と共感する	⑦「お子さんは慎重派な性格なんです」
③「お母さんが選択肢をいくつか与えてあげるといいと思いますよ」	⑧「いろいろなことに対して、たくさん考えているんですね。考えていることに対して、すべてを委ねるんじゃないやなくて、選択肢を与えたり、質問してみるのはどうでしょうか」
④「たたくさんのことを考えているから、慎重なんです」	⑨「子どもが自分で考え、成長しているということなので、見守ってみましょう」
⑤(提案してみる)一緒になって子どもと何かを選ぶなど。“神様の言う通り”などを使う。	⑩「子どもなりにいろいろ考えているんだと思います。見守ってあげてください」

★子どもの視点からのメッセージ

①迷っている。ママからのちよとしたアドバイスが欲しい。考える時間が欲しい。初めて	⑥いろいろなることを学ぼうとしてたくさん考えている。温かい目で見守ってほしい。
②あれも、これも選べない。	⑦じっくり考えたい。
③慎重に考えてから決めたい。	⑧物事に対して、どれに決めたらいいのかわからない。
④情報がたくさん入ってくるから。	⑨「自分自身で考えられるようになった証拠であると思います」
⑤いろいろなることを試してみたい。	⑩見守ってほしい。

る。また、保護者の言葉の背景にある問題点についても、それぞれ意見を出し合いながらリフレーミングをしている様子だった。

その後、話し合いの様子をまとめ、各グループが発表を行った。学生は、各グループの発表から気付いたこととして、「保護者の気持ちになることで、素直に受け入れられる言葉がけや嬉しい気持ちになった言葉がけがあった」と感想を述べている。逆に「すっきりしない、保育者に理解してもらえていないと感じた」という意見もあった。その中で、素直に受け入れられる言葉がけには「子どものことを理解してもらっていると感じた」「保護者の気持ちに寄り添っている」などの振り返りがあった。保育者からのリフレーミングは保護者が理解できるように子どもの発達の特徴を根拠として具体的に伝える工夫が必要である。そのため、保育者は、保護者が子育て相談で元気になり、子どもに向ける愛情がさらに高まるようにしていかなければならない。

#### 4. 2021(令和3)年授業アンケート

[調査方法] Microsoft forms による回答

設問5つ選択肢5つ自由記述1つ

[調査対象及び人数] 本学保育科2年生61名

(保育士課程履修者)

1回目(4/9)49名回答

15回目(7/21)45名回答

[調査時期] 2021(令和3)年前期1回目と15回目の講義にて2回実施

[調査内容] 自分が保育者として保護者と関わる際、相談支援において心配なこと、不安なこと

#### 5. 2021(令和3)年授業アンケートの結果

授業で行った理論やグループワークがどのような意識の変化へとつながったのか、1回目と15回目の学生アンケートを比べた。また、授業で行った内容についての感想や意見から学びの効果について考察する。

図14.15は「できる」と感じた学生が少し増え

たものの、「少しできる」「普通」「少しできない」の割合は、消極的な回数が多い結果だった。「できない」と感じた学生が15回目はどちらもいかなかったことは、15回の講義の演習を経験したことで不安を少しでも解消できたものだと考えられる。また、図16の「保護者へのアドバイス」も演習の成果から自信につながったと推測される。つぎの図17の「子どもの気になることを保護者に伝えること」は、保育者からのアンケートからもあるように、実際自分の姿を思い浮かべて、保護者対応の難しさを実感したものと考えられる。

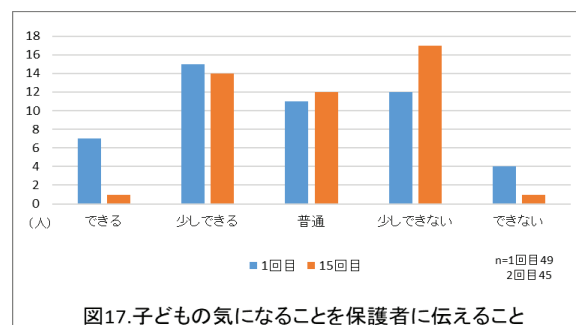
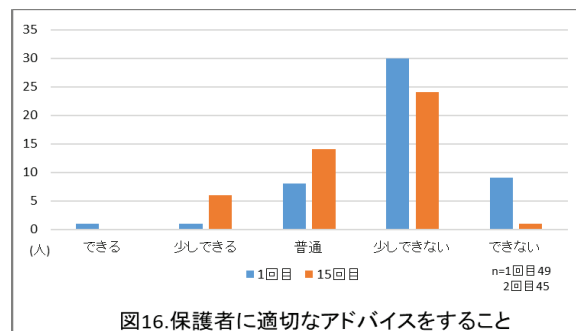
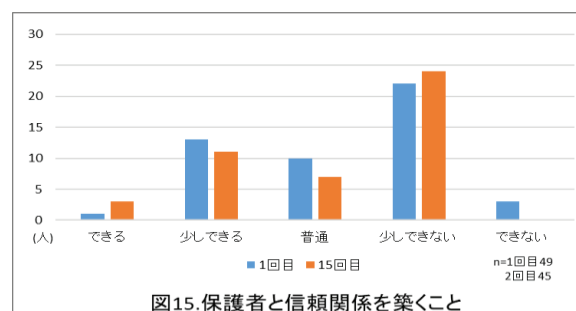
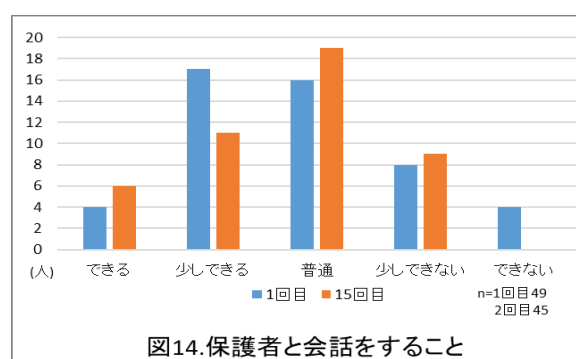


図18. 図19は、15回目だけのアンケート項目である。図18の演習内容については、グループワークが一番多く、次いでロールプレイであった。どちらもグループメンバーとのやりとりにおいて、自分の考えにはない思いや考えに触れ、刺激を受けたことが実感として感じられたと推測される。図19は、保育者になったことをイメージして、心配・不安なことをまとめたものである。その結果、「苦情の対応」や「保護者との対立」「誤解を生じてしまった場合」など状況が悪くなった場合を想定して、その対応に不安を募らせていることが分かった。

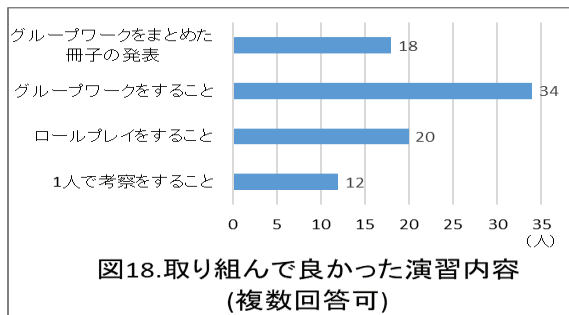


図18. 取り組んで良かった演習内容 (複数回答可)

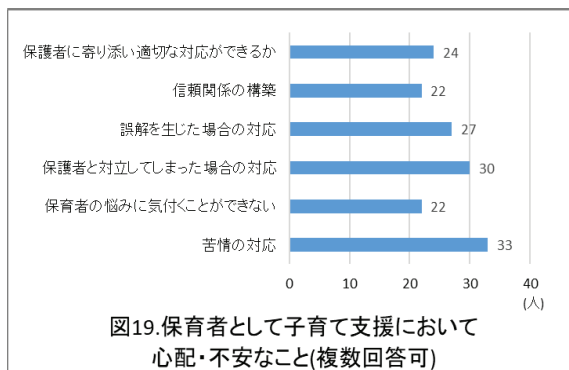


図19. 保育者として子育て支援において心配・不安なこと(複数回答可)

## 6. 考察と課題

2019(令和元)年から担当している授業を振り返りながら、「保育相談支援(子育て支援)」の授業方法を模索してきた。2020(令和2)年度は保護者の相談に応えながら、グループワークの話し合いが一つの授業方法として有効であると示した。

2021(令和3)年度は保育者の立場から子育て支援を考え、保育者になる姿をイメージしながら、グループワークを軸に演習を行った。その目的は、「コミュニケーション能力」を向上させることと「子ども理解」における考え方や伝え方の学びを深めることである。

演習では、事例課題の内容に合わせて3~7人ぐ

らいのグループを作り、その都度演習のメンバーを代えて行ってきた。授業での学生の様子は、今まであまり話をしたことがない人と対話することに、少しばかりの緊張感を持ちながら取り組んでいる姿だった。そして、子育て支援の基本でもある“傾聴”“受容”“共感”を意識しながら、たくさんのメンバーとコミュニケーションをとる機会となった。また、グループワークでは、意見交換や話し合いから、他者の意見や思いに触れることができ、自分との相違点からいろいろな刺激を受ける機会となった。

その他にも「ネガティブな言葉をポジティブに置き換える方法」や「リフレーミングによる伝え方」の2つの実施は、いろいろな捉え方や見方をすることで柔軟な考え方をすることができた。そして、一人一人に合わせたポジティブな表現で捉えることが重要であることを実感することができた。また、伝え方によって保護者の受け取る印象が異なることから、保護者には肯定的に捉えて伝える方法や、保護者に寄り添う支援の大切さに気付くことができた。

これらのことから、授業の目的として掲げた“コミュニケーション能力”の向上と“子ども理解”における考え方や伝え方を学んだことは、子育て支援の疑似体験をする良い機会となり、基礎的な学びを経験することができた。

しかし、授業アンケートの結果にもあるように、学生の中には、一人で考察する時間をもう少し与えてほしいという意見もあり、自分の考えとグループでの考えの二通りから事案をしっかりと見つめさせていくことも大切なことだと考えさせられた。また、子どもの理解から保護者に寄り添った関わりを学んだものの、「保育者として保護者対応ができるのか」という、就職後の不安が拭い去れないという要素も浮かび上がった結果となった。

今回の授業アンケートはあくまでも学生の主観的な評価をまとめたものであり、ダイニング・クルーガー効果を考慮すると、授業実践の評価や測定の根拠・証拠とするのは難しい部分があった。授業実践の評価・測定として客観的な調査が必要



だと思われる。

以上のことから、保育者として身につけておくべき能力や技術面に定義づけをし、客観的な指標・尺度を用いて評価・測定することで、学びの達成度を実感することができるのではないだろうか。また、寺山、公文他(2015)は「他職種間での成功体験の共有は、他の職種の仕事内容や姿勢、考え方を学ぶ機会になり、その成功体験を今後の自分の行動に活かそうとしていることが分かった」<sup>13)</sup>としている。演習の中で、保育者の子育て支援の成功体験を共有する機会を設けることは、学生の自己効力感を高める一つの授業方法ではないかと考えられる。

子育て支援における先行研究の中には、関係機関と連携をして、子育て支援の体験活動を行っているところもある。しかし、あくまでも校内でできることとして、学生のよりよい学びにつながる授業方法を考察し研究してきた。

今後は、演習における客観的な評価や指標を工夫したり、現役保育者の成功体験を共有する機会を設けたりなど、学生の自己効力感を高められるような方法を他の科目「教職実践演習」や「保育実践演習」のカリキュラムとも照らし合わせながら、考えていきたい。

#### 謝辞

保護者子育てアンケートにご協力いただいたみどり保育園、弘前すみれ保育園、柴田幼稚園の保育者の皆様に深く感謝申し上げます。

#### 利益相反

本研究に関する利益相反はない。

#### 引用文献

- 1) 保育所保育指針解説. 厚生労働省 編. pp. 14 フレーベル館, 2018
- 2) 保育所保育指針. 厚生労働省 編. pp. 17-18 フレーベル館, 2018
- 3) 福井 逸子, 小栗 正裕, 瀧川 光治. 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する

研究 (1) —短期大学へのアンケート調査の分析を通して—北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 1:135-150, 2008

- 4) 江莉川 淳子. 保護者支援のあり方を習得するための授業方法に関する一考察(第1報)～「保育相談支援」がよりよい学生への学びになるために～. 東北女子短期大学紀要 59:60-71, 2020
- 5) 中山 智哉, 杉岡 品子. 保育士の保育相談支援に関する質的研究—相談支援における困難性と専門性の深化のプロセス—九州女子大学紀要 53, 1:19-37, 2016
- 6) 保育所保育指針解説. 厚生労働省 編. pp. 345 フレーベル館, 2018
- 7) 門田 理世. 保育の場における現職教育のあり方について(総説) 保育学研究 58:第2・3号合併号219-222, 2020
- 8) 加藤 由美, 安藤 美華代. 大学生の人間関係育成に関する研究の動向と保育者養成教育への活用に向けて. 岡山大学教師教育開発センター紀要 9:337-350, 2019
- 9) 小原 敏郎, 橋本 好市, 三浦 主博. 学ぶ・わかる・みえるシリーズ保育と現代社会 演習・保育と子育て支援. pp114-117 株式会社みらい, 2019
- 10) 永野典詞, 岸本元気. 保育士・幼稚園教諭のための保護者支援 保育ソーシャルワークで学ぶ相談支援. pp086 風鳴舎, 2014
- 11) 文部科学省. 幼児理解に基づいた評価. pp14-23 チャイルド社, 2019
- 12) 小原 敏郎, 橋本 好市, 三浦 主博. 学ぶ・わかる・みえる シリーズ保育と現代社会 演習・保育と子育て支援. pp114 株式会社みらい
- 13) 寺山 雅人, 公文 久見, 川田 恵, 他. 当院リハビリテーション部における専門職連携教育の取り組み～ポートフォリオシートを用いての成功体験の共有～. 第50回日本理学療法学会大会(東京) P3-C-1143, 2015

(受付:2021年9月14日, 受理:2022年1月21日)